

特集

GRAPH KAGOSHIMA
REPORT

S
A
T
S
U
M
A

薩摩焼の再



島津家17代当主島津義弘しまづよしひろが朝鮮から連れ帰った80人余りの陶工たちによつて、慶長4(1599)年に始められた薩摩焼。当時の大名の間で茶の湯が流行していたことや産業振興の目的から、藩主の命により保護され、県内各地で質の高い薩摩焼が作られることとなりました。

平成14(2002)年には国指定伝統的工芸品の指定を受け、現在も県内のたくさん窯元で、伝統的な薩摩焼はもちろんのこと、作家の自由な発想を生かしたものなど、たくさん薩摩焼が生まれています。

今回の特集では、パリで行われている薩摩焼パリ伝統美展のようすなど、「再」をテーマに薩摩焼をクローズアップしてみたいと思います。



再び パリの地で S A T S U M A

▶「薩摩焼パリ伝統美展」の会場となった
フランス国立陶磁器美術館(セーブル美術館)。



薩摩焼パリ伝統美展

慶応3(1867)年、薩摩藩は第2回パリ万博に薩摩焼を藩単独で出品。高い評価を得て、ヨーロッパをはじめとする海外で「SATSUMA」としてその名を知られるきっかけとなった。

昨年は、その年から140年目にあたり、それを記念してパリのフランス国立陶磁器美術館(セーブル美術館)で「薩摩焼パリ伝統美展」が開催(2月18日まで)され、多くの来場者を集めている。

薩摩焼を食い入るようにつめる来館者のようすから、140年の時を経過した今もお、薩摩焼は多くの人々を魅了しつづけることがうかがえた。



通訳を介し、セーブル美術館主任学芸員より説明を聞く知事。

薩摩焼パリ伝統美展 出展作品介绍



しろだかつゆりのこみみつきかびん
◆白蛇蝸釉茸耳付花瓶◆



かたつきちいれ
◆肩衝茶入◆



にしきでかちょうもんだかちょうこくざりつぼ
◆錦手花鳥文鷹彫刻飾壺◆



こくゆうはりつりゆうもんはんずかめ
◆黒釉貼付龍文半胴壺◆

現代薩摩の陶芸パリ展

「薩摩焼パリ伝統美展」と併せて、昨年11月21日から12月15日まで、エッフェル塔近くのパリ日本文化会館において現代作家などの作品46点が展示された。現代作家の感性と伝統の技の融合した新しい薩摩焼の魅力を感じていただいた。



「里帰り展」を開催します

パリで行われた2つの展覧会に展示された作品を薩摩焼の故郷 鹿児島などでご覧いただけます。

- ◆会 期:平成20年9月～平成21年3月
- ◆場 所:歴史資料センター黎明館
(平成20年12月～平成21年1月)
堺市博物館、江戸東京博物館(予定)

*開館時間や休館日については、各施設へご確認ください。

再確認しよう

白薩摩

SHIRO SATSUMA

◆なぜ白い？

土が白いからですよ。
薩摩焼が伝わった当初は、県内に土が見つからず、土や釉薬※ゆうやくは朝鮮のものを使い、火だけ日本のものを使って作られていたことから「火ばかり」と言われていたそうです。後に、県内でも白土が見つかったようです。

※陶磁器の素地の表面に施すガラス質の溶液

◆発展経路は？

もともと藩主のみが使うことのできた献上品でした。藩主の命により保護され、発展していきました。



◆魅力は？

絢爛豪華・優美・繊細※せんさいさが特長でしょう。
貫入※くわんにゅうの入ったなめらかな白地と、そこに書き加えられる美しい絵や模様※もようが美しく調和しています。日本人の持つ繊細さが存分に発揮される工芸品ですね。

※ガラス質のつわくすりがか本焼き後に冷めて縮む過程入るため。



昔から絵を描くのが好きで、絵付師になりました。工房の庭に草花を植えて、絵柄の参考にしています。
白薩摩の伝統的な柄として、花鳥風月や紋様などがありますが、それらを大切にしつつ、現代にマッチした柄にも挑戦しています。

●問い合わせ先
絵付工房 秋月 窯
指宿市十二町321-4

0993 (24) 2427

<http://mytown.j-bee.com/satsumayaki/>



にしだ あきお
西田 秋雄さん

S A T S U M A

白と黒。違いを

◆薩摩焼を大別する「白薩摩」と「黒薩摩」。改めて、それぞれの違いや魅力を再確認してみよう。



あり やま れい せき
有山 禮石さん

小さいころから父親の手伝いをしており、物心ついたころから薩摩焼にたずさわっています。黒薩摩はバラエティーに富んだ焼き物で、自分の思いを形にしやすいたところが魅力です。前作ったものより、もっと良いものを作りたいという気持ちで作陶を続けています。

●問い合わせ先

ちょうたろう

指宿 長太郎焼窯元

指宿市東方7834-8

0993 (22) 3927



黒薩摩

KURO SATSUMA

◆なぜ黒い？

土に鉄分を含んでいるからです。釉薬にも鉄物を含んでいるので、黒い色になります。

昔の人は土を求めて、県内各地を採し回り、各地で窯が開かれました。

◆発展経路は？

藩主用の白薩摩に対して、庶民が使うことができました。花瓶や置物にとどまらず、茶碗や皿などの日用品も作られ、広く愛されてきました。

◆魅力は？

素朴で、花や料理を引き立たせ、手にしっとりとなじむところでしょうか。

使い勝手の良さも魅力です。使い込むほどに、表面には味わいが出てきます。

電子レンジで使えるものもあるんですよ。毎日使っても飽きのこない黒薩摩をじゃんじゃん使って欲しいですね。



世界を魅了した一粒を 再びかごしまの地で

SATSUMA



1か月に作れるのは、多くても30個という。



「ほぼ一日中作業していますが、好きなことなので苦になりません」。

ツジの名所で有名な垂水市高峠の近く。山々や畑に囲まれた古民家の一つが薩摩焼絵付け師室田志保さんの工房だ。

室田さんが薩摩ボタンの存在を知ったのは、8年前。小さなボタンの中に表現される世界に興味を抱いた。日本で一番多く薩摩ボタンを収集している方の元を訪ね、ボタンの魅力に触れ、薩摩ボタンを作っていくことを決めた。

「小さいボタンの中に、盛り金、砂子、金欄手といった薩摩焼の技法が詰め込まれているところ



趣味は「お笑い」。室田さんのブログを読むと、納得できる。

●問い合わせ先

薩摩志史 室田 志保さん

垂水市田神3713 0994 (35) 0058

<http://satsuma.cc/>

が魅力ですね。小さくとも、とても見応えがあります。歴史ある薩摩ボタンを復興したい、そして他人がやっていないことをやりたいという気持ちがあったので、薩摩ボタンの絵付けを専門にすることにしました。工房を始めて3年経ちますが、ホームページやブログ、口コミで薩摩ボタンのことが伝わり、注文も増え、手応えを感じています」と室田さん。

ボタンを着物の帯留めとしても使う人も多いという。工房に並べられた作品を見ていると、

自分が薩摩ボタンを付けて、着飾っている姿を思わず想像してしました。

薩摩ボタンとは

江戸時代の末期、薩摩藩が軍資金を得るために制作し、海外へも輸出していた薩摩焼の陶器製のボタン。

海外では人気が高く流通したが、国内ではあまり出回らなかった。

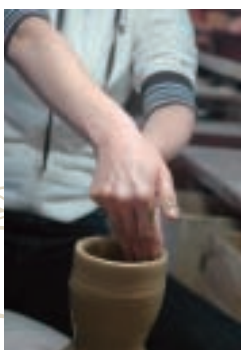
生産性の悪さから、ボタンを専門に絵付けする者は途絶えていた。



実物大のボタン。帯留めとして注文した女性への納品を待つ。



「ひゃ〜。けっこう力があるんですね」。



両手の指の腹を使って、優しく…

SATSUMA
土に触れて自分で作って
良さを再確認

薩摩焼をもっと身近に感じたいと思うのなら、自分で作ってみてはいかがだろうか。始良郡加治木町にある龍門司焼企業組合では、だれでも気軽に薩摩焼を作ることができる。

「土も釉薬も地元で取れるものを使っているの、”地産地消の薩摩焼 龍門司焼”ができてあります」と語るのは、同組合理事長の川原史郎さん。自分で作ると愛着も人一倍。少々曲がついていようが、大きさが予想と違っていようが、だれもが自分オリジナルの出来上がり喜びという。

まずは職人さんの手本を見せてもらう。「ぐっと指を押し、すっと両手で挟みながら厚



「この湯飲みで飲むお茶はとってもおいしいそう」と体験者。

みを調整します」と、話している間にできあがった。

さて、挑戦。簡単そうに見えるが、全然思うようにいかない。

驚きの連続、悲鳴の連続であった。まず、土のなめらかさに驚いた。そして、くねくねにしか成形できない自分の不器用さに驚いた。静かな工房に悲鳴が響き渡る。

職人さんに手伝われながら、どうにか”自分オリジナルの薩摩焼湯飲み”が形作られた。



「自分オリジナルの薩摩焼”を自分の手で作ってみませんか」と川原さん。

●問い合わせ先
龍門司焼企業組合
始良郡加治木町小山田5940
0995(62)2549
<http://ryumonjiyaki.jp/>
陶芸体験は要予約(2,000円〜)

その後の工程は川原さんたちにお任せし、3週間後再び訪問。
ちよつと不恰好ではあるが、立派な湯飲みができあがっていた。いい色になるように大切に使い込んでいきたい。

(問い合わせ先) 県庁かごしまPR課 099(286)3050